

# 変える・守る・育てる・創る

## 女だから経営論

第29回

取材・文 三好 かやの



### 森川美保さん (愛知県・美浜町)

〒470-2404 愛知県知多郡美浜町河和字岡ノ脇67  
TEL0569-82-1931

#### Profile —

もりかわ・みほ 1965年愛知県常滑市生まれ。94年6月、当時サラリーマンだった光男さんと結婚。96年12月、光男さんの退職を機に翌1月より専業農家としてスタート。米70a、大豆30a、ジャガイモ10aの栽培と並行して島本微生物農法による肥料販売も手がける。99年4月、長女季の野(きのの)ちゃんを出産。初めての育児に奮闘しながらも、就農3年目にして、規模拡大、農産加工、消費者との交流を積極的に展開している。

「ごめんねー。ちょっとうるさくて揺れるけど、我慢してねー。この子がお腹にいた時は、そう言いながら、臨月まで運転してたのよ」肥料用の作業場で、パワーショベルを操縦しながら、森川美保さん(33歳)が話してくれた。

私も座席の横に乗せてもらつたが、ブルブル揺れるし、かなりうるさい。これでは子宮の中もさぞや脹やかだつただろう。それでも彼女は今年の4月12日、長女の季の野ちゃんを無事出産。まだ生後1ヶ月の赤ちゃんは、かたわらの畑でひいおばあちゃんに抱かれてすやすや眠っていた。彼女にとつてこのエンジン音は子守歌代わりなのかもしれない。

これまで「大きな機械はどうも苦手」という奥さんの声を何度も耳にしてきたが、彼女がショベルを自在に操る様は実に楽しそうだ。

「どうしても機械でいいきれない部分があるでしょ。そんな時は、私がこれを運転して、



パワーショベルの運転も、お手の物

「産まれたら、取材に行つてもいい?」

ダンナがスコップで隅の土を集めてたりして私が美保さんと初めて会ったのは、今年の3月。彼女はまだお腹に子どもがいて、私は2ヶ月の娘を抱えていた(詳しくは39号の記事をご覧ください)。

とにかく就農間もないけれど、夫の光男さんは始めた農業にムチャクチャやり甲斐を感じていて、出産後もバリバリ働くんだと張り切っていた。



夫の光男さん、この春生まれた季の野ちゃんと

なあ。

## 縫い針がいつの間にやら……

とはいってもこの美保さん。3年前までサラリーマンの妻だった。

美浜町の隣、常滑市の写真館の三人兄弟の末娘として生まれ、杉山女子学園大学の家政学部被服科を卒業。母方の叔父が経営する大規模鶏卵業者「知多エッグ」で働いた後、エロビクス教室で光男さんと出会い結婚した。

被服科卒だけあって、自分のウエディングドレスも自ら仕立てたほどの腕前。

「ずっと縫い針を持つていたのに、それがいつの間にか、鎌に代わり、鍬に代わり……なんでパワーショベルになっちゃったんだろう？」

知多半島のほぼ中央に位置する美浜町は、稻作とハウスみかんの栽培がさかんな町。稲作農家の大半を兼業農家が占めている。それを支えているのは会社勤めのサラリーマン。最近は60歳を過ぎてから、退職金をつぎ込んで大型機械を導入し、本格的に「定年帰農」する人も増えているという。

美保さんの嫁ぎ先である森川家もそうだった。光男さんは地元企業に勤めながら、休日はヨットやエアロビクスを楽しんでいた。



肥料の材料となる頁岩。作物が必要な分だけの養分を供給する作用がある



出荷前の微生物肥料。顧客の作目、土壤の状態に合わせて配合する

「ゆくゆくは、專業になろうと思っていたけど……」その時期が急に早まったのには訳がある。

「会社から帰ってくると、今日は上司がどうした、俺の評価が妥当じゃない……グチグチグチ。もう嫌気がさしちゃって」（美保さん）

それならいっそ会社を辞めて、いずれやるつもりだった農業を始めよう。そう決心した光男さんは、96年末に退職。翌年から森川夫婦は晴れて専業農家となつたのだ。

## これからやるなら土を作れ！

一人でどんな農業を始めるかを思案していた折、美保さんは、ある自然食品店の主催する講演会で、「酵素の世界社」が推進する「島本微生物農法」に出会い、興味を抱いた。早速光男さんにも話して詳しい話を聞き、同社の会員となる。

この農法は、戦後島本覚也氏が滋賀県水口町に農場を開設したのが始まり。現在は創始者の二代目である島本邦彦氏が会長を務めている。あのEM菌が嫌気性であるのに対し、こちらは肥料に好気性の発酵微生物を用いるのが特徴。米、野菜農家を中心に、国内はもちろん、中国や韓国の農家でも広く指導を得

ている。

「これから農業を始めるなら、人と同じことをやついてもダメ。何か確実に収益の上がる新しいことを始められないだろうか？」

森川夫妻が「酵素の世界社」に相談を持ちかけると、こんな答えが返ってきた。

「うちと同じことをやればいい。土を作つて売るんです」

作物ではなく土を売る。つまり自分の田畠だけでなく、他の農家に向けて、島本農法の微生物を用いた肥料を販売してはどうかといふのだ。

「まさかそんなこと言われると思っていなかつたので、びっくり！」

しばらく思案した末、「人は自ら米や野菜を栽培しながら、同時に肥料の販売も手がけることに決めた。つまり米なら米用、みかんならみかん用の肥料を注文に応じて配合し、必要な分だけ販売する。その際、前作での施肥状況も考慮して、それに合ったものを作る。

早速二人でブロックを積み上げ、肥料専用の作業場も作った。現在は、1袋300kg当たり12000円～13000円で販売している。それならいっそ、肥料販売に徹した方が、効率がいいのではないか？」

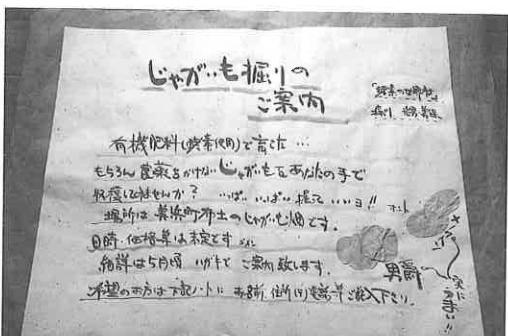
畑でいいものを作れば、それだけ私たちの肥料がいかに優れているかがわかる。地元の農家にこの肥料の良さを実践しながら広めていきたい」（美保さん）

現在森川さんが手がける作物は、米70a、大豆30a、ジャガイモ10a。

「米を米、豆を豆で売ったんじゃ、儲けはたかが知れてる。加工して付加価値をつけなくちゃ」がモットーだ。

お米は直接販売する他、玄米餅に加工して販売。それから新しく始めたじやがいもは、「出産やら何やらで忙しくて、とても自分で掘つてから搗くと、ことごとく失敗。試行錯誤を重ねた末、玄米の場合は3日間水につけるところよりもいい仕上がりになることがわかった。

## しあわせの値段つて？



掘つててヒマのないじゃがいもは、お客様に案内を出して自ら収穫してもらうことに……

さらに大豆は美保さんが味噌に加工して販売。それから新しく始めたじやがいもは、「出産やら何やらで忙しくて、とても自分で掘つてから搗くと、ことごとく失敗。試行錯誤を重ねた末、玄米の場合は3日間水につけるところよりもいい仕上がりになることがわかった。

美保さんからは、そんなアイデアがポンポン飛び出していく。失敗しても忙しくても、だけでいいから」

お米は直接販売する他、玄米餅に加工して販売。それから新しく始めたじやがいもは、「出産やら何やらで忙しくて、とても自分で掘つてから搗くと、ことごとく失敗。試行錯誤を重ねた末、玄米の場合は3日間水につけるところよりもいい仕上がりになることがわかった。



杉浦剛さん 11haの自作地の他、オペレーターとして5haの水田を管理も一手に引き受ける。何かと相談に乗ってくれる兄貴的存在



大崎万助さん 全国でもトップクラスの品質を誇るハウスみかん「みはまっこ」を栽培。栽培面積は少なくとも、その品質の高さから、東京大田市場でもひっぱりだこである

さらに、森川夫妻は、近隣の生産者たちと積極的につながりを結んでいる。地元の稲作研究会の先輩である杉浦剛さんは、自作地11haの他に、オペレーターとして5haの水田を管理も一手に引き受ける。何かと相談に乗ってくれる兄貴的存在

「いくらダンナが農業をやりたいと思つても、奥さんの後押しがないから始められない。現にそれが原因で踏み切れない人もいる」たしかに、いざこの農家の経営も、伴侶の「後押し」あつてこそ。ところが、「うちの場合は、後押しを通り越して、カミさんには首根つこつかまえられて、引っ張られてるって感じがするなあ」と苦笑い。確かに会社を辞めたことで安定した収入は途絶えてしまった。おまけに2年目には美保さんが妊娠、3年目に出産。二人きりで始まつたばかりの経営を支えていくのは、しんどいはずだ。それでも美保さんは、「たしかにしんどいけれど、毎晩グチばかり聞かされていた頃より、今の方がずっとまし」と、晴れやかに言い切ってしまうのだ。

### ネットワークを結んで

決してタダではすまらない。いや、むしろどんな局面にもビジネスチャンスを模索することを、楽しんでいるかのようだ。そんな彼女を評して光男さんが言う。

「いくらダンナが農業をやりたいと思つても、奥さんの後押しがないから始められない。現にそれが原因で踏み切れない人もいる」たしかに、いざこの農家の経営も、伴侶の「後押し」あつてこそ。ところが、「うちの場合は、後押しを通り越して、カミさんには首根つこつかまえられて、引っ張られてるって感じがするなあ」と苦笑い。確かに会社を辞めたことで安定した収入は途絶えてしまった。おまけに2年目には美保さんが妊娠、3年目に出産。二人きりで始まつたばかりの経営を支えていくのは、しんどいはずだ。それでも美保さんは、「たしかにしんどいけれど、毎晩グチばかり聞かされていた頃より、今の方がずっとまし」と、晴れやかに言い切ってしまうのだ。

川夫妻の肥料が10a分投入される。また、武豊町の「わっぱ協同組合」の人たちとは、杉浦さんの仲立ちで出会った。「わっぱ」は、名古屋に本部を持つ(社)福共生福祉会の通称で、障害を持つ人たちが自立を目指してリサイクル作業所、パン工場、クリエイター工場などを運営している。武豊町の農場では13人のメンバーが、米や野菜作りに励んでいる。収穫した野菜はわっぱの会の仲間たちの食事に使われたり、ショッピングで販売されている。いずれはパン工場で使う小麦も自分で育てたいと考えているが、なかなか手が回らない。光男さんは、それなら自分たちがその小麦を手がけてみようと考えている。といっても、国産小麦からパンを作るのは難しい。

「外国産の小麦に比べて、グルテンが足りないのが原因らしい。その分、うちの餅米を粉にして足せばいいんじゃないかな。きっと面白んだなあ」

そんな強者の美保さんにも、ひとつ泣きどころがある。生まれたばかりの季の野ちゃんだ。

森川家では、美保さんが仕事に出てしまうと、子どもの面倒を見る人がいない。

これは私にもよくわかるのだが、0歳児を抱えて仕事を続けようすると、心は前に進んでもちつとも身動きがとれなくなる。ただでさえやること、やりたいことはいっぱいある

いことができる」と光男さんがいえば、美保さんは、「島本農法のつながりで、韓國の人たちとも知り合いました。彼らたちに本格的なキムチの作り方を習って、自分で作った白菜を漬け存在だ。

大崎万助さんは、高品質で知られる、ハウスみかん「みはまっこ」を全国ブランドにまで高めた立役者だ。今年から、彼の畑にも森

川夫妻の肥料が10a分投入される。また、武豊町の「わっぱ協同組合」の人たちとは、杉浦さんの仲立ちで出会った。「わ

っぱ」は、名古屋に本部を持つ(社)福共生福祉会の通称で、障害を持つ人たちが自立を目指してリサイクル作業所、パン工場、クリエイター工場などを運営している。武豊町の農

場では13人のメンバーが、米や野菜作りに励んでいる。収穫した野菜はわっぱの会の仲間たちの食事に使われたり、ショッピングで販売されている。いずれはパン工場で使う小麦も自分で育てたいと考えているが、なかなか手が回らない。光男さんは、それなら自分たちがその小麦を手がけてみようと考えている。といつても、国産小麦からパンを作るのは難しい。

「外国産の小麦に比べて、グルテンが足りないのが原因らしい。その分、うちの餅米を粉にして足せばいいんじゃないかな。きっと面白んだなあ」

幸い私は保育園という強い味方がある

精神障害者たちが、野菜の栽培を通して社会的自立を目指している。中でも

スタッフの島田明子さんは、昨年長女を出産。育児の

先輩としてアドバイスとエールを送ってくれている



わっぱ共同組合の人たちが、野菜の栽培を通して社会的自立を目指している。中でもスタッフの島田明子さんは、昨年長女を出産。育児の先輩としてアドバイスとエールを送ってくれている

以前ある取材で、「同じトラクタ1台でも、俺一人が運転するより、ああちゃんも動かせた方が、絶対にいい」と言われたことがある。得手不得手はあるにせよ、大型機械を動かせるかああちゃんは、何にも変えがたい戦力である。それにしても、美保さんはどこで機械の操作を会得したのだろう。

それは独身時代、叔父さんの経営する「知多エッグ」で働いた経験が生かされている。

親戚のよしみで手伝いに行っていたので最初は乗り気ではなかったようだ。しかも採卵用の鶏が2万羽もいる大規模農場だから、毎日排出される鶏糞の量もハンパじゃない。それを切り返すのが美保さんの仕事だった。

「頭のてっぺんから、足の先まで鶏糞まみれ。なんであたしこんなことしてるんだろうって思つてた。でも、今思うとあの経験が生きてるんだなあ」

森川家では、美保さんが仕事に出てしまうと、子どもの面倒を見る人がいない。

これは私にもよくわかるのだが、0歳児を抱えて仕事を続けようすると、心は前に進んでもちつとも身動きがとれなくなる。ただでさえやること、やりたいことはいっぱいある

のに……焦る焦る。

幸い私は保育園という強い味方がある

ので、なんとか凌いでいるが、美浜町には0歳児を預かる施設もシステムもないというではないか!

取材中、まだ生後1ヶ月の季の野ちゃんを抱き抱えながら、美保さんは何度も何度も、早く首が座らないかな。早く、座らないかな」と呟いていた。たしかに首も座らない赤ちゃんを連れていては、運転もままならない。さすがの美保さんも、弱気になっちゃうの?

「よし、町長に直談判しよう」

「えつ?」「私みたいなお母さんが安心して働くように、0歳児を預かるシステムを作つてください。福祉課とかじや坪が開かないから、助産婦さんと一緒に直接町長に直訴するわ

さすが。せつから始めた農業も、初めて授

かったわが子も大事に育んでいつてほしい。

思わず「頑張れー!」と心で叫んで美浜を後

にしたのだった。